

医療と介護のありたい姿 ロードマップ

「つくば市の医療と介護のありたい姿」は、医療や介護を必要とする状態の高齢者でも、住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の実情に応じた「地域包括ケアシステム」を推進するために、つくば市在宅医療・介護連携推進協議会において協議・作成したものです。

本ロードマップは、その達成のため、在宅医療・介護連携推進事業等において取り組む内容と2025年の目標、2040年の理想についてまとめ、専門職、関係機関、行政等が連携・協力するための指針になるものです(第8期市高齢者福祉計画に掲載予定)。

つくば市の医療と介護のありたい姿

ありたい姿1 希望の最期を共に考える

本人や家族の希望に応じて、自宅を中心とする地域の中で安心して最期を迎えることができている。

ありたい姿2 本人を第一に考えた多職種連携

専門職は、つくば市のありたい姿を共有し、本人・家族や地域の状況を踏まえ、共に最善のアプローチを考え、対応することができている。

ありたい姿3 専門職のスキルアップとやりがい

医療・介護の専門職は、働きやすく、やりがいがある環境で専門性を発揮し、本人や家族が望む生活の継続を支援することができている。

ありたい姿4 認知症になっても安心して暮らせる地域

認知症になっても住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けられる。

ありたい姿5 多様な生活の場の提供

本人は、在宅でも介護施設でも、自分らしく暮らすことができている。

ありたい姿6 相互に支え合う生活支援・介護予防

住み慣れた地域には健康づくりや住民同士がつながる場所があり、高齢になっても、介護が必要になっても地域の中で役割がある。

ありたい姿7 誰一人取り残さない

誰一人取り残されず、一人ひとりの安心が守られ、地域の隅々まで医療と介護、生活支援がいきわたり、自分らしく生きることができている。

ありたい姿1 希望の最期を共に考える

本人や家族の希望に応じて、自宅を中心とする地域の中で安心して最期を迎えることができる。

(終活やACPを通じた本人の意思と多職種理解)

2025年の目標

ACPや人生会議を専門職が理解し、当たり前のように本人や家族に説明し、日常的に話題にするようになっている。

2040年の理想

市民は健康な時から自身の最期のあり方を考えることが当然になっており、看取りの時期までにはそれを専門職と確実に共有することができる。

ありたい姿2 本人を第一に考えた多職種連携

専門職は、つくば市のありたい姿を共有し、本人・家族や地域の状況を踏まえ、共に最善のアプローチを考え、対応することができる。

(多職種は、専門性の背景を超えて、本人の希望や望ましい生活を第一に考えて知恵を出し合う関係)

2025年の目標

専門職は、医療と介護の専門職間のコミュニケーションをとることへの苦手意識が低くなっていて、各専門性を十分に発揮し、本人を支援する連携ができている。

2040年の理想

医療と介護、病院と診療所、診療所と診療所など、地域包括ケアを担う専門職間の連携が、特別な負担なくできる仕組みが完成している。専門職間の顔が見える関係は維持されており、互いに相手の専門性や価値観に敬意を払い尊重しあう関係がさらに深まっている。

医療と介護のありたい姿 ロードマップ

ありたい姿3 専門職のスキルアップとやりがい

医療・介護の専門職は、働きやすく、やりがいがある環境で専門性を発揮し、本人や家族が望む生活の継続を支援することができている。

(医療と介護の専門職は、やりがいのある魅力的な職種であり、燃え尽きることなく、成長し続けることができている)

2025年の目標

専門職を対象とした魅力的な研修活動がさらに充実しており、積極的に参加する人が増加している。ケアマネジャーの幸福度をはじめとする専門職のやりがいの指標が向上している。

2040年の理想

若年人口が減少しても、専門職（特に介護専門職）はやりがいのある職業として、認知され、能力・やる気のある人材が地域の医療・介護を支えている。

ありたい姿4 認知症になっても安心して暮らせる地域

認知症になっても住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けられる。

(地域住民・医療介護の専門職・行政等の総力による認知症の人や家族との関わり)

2025年の目標

多職種が携わっている認知症の方の変化の気付きや対応力が向上し、本人を支援するチームの支援力も向上している。

2040年の理想

地域での見守りに加えて、ICTやロボットなどのつくば市ならではの技術を実装活用することで、多数の認知症の人が住み慣れた場所で安心して生活することができている。

ありたい姿5 多様な生活の場の提供

本人は、在宅でも介護施設でも、自分らしく暮らすことができている。

（本人が安心して在宅療養できる医療・介護サービスの充実と自宅生活の延長としての特養等での生活の充実）

2025年の目標

専門職は、各種の介護施設や介護サービス事業の特色を利用者の視点に立って分かりやすく説明でき、利用者の価値観にあったサービスを選択することを支援できるようになっている。

2040年の理想

施設サービスの質がさらに向上しており、地域の中で介護施設が今以上に身近な存在となっている。その結果として介護施設に入居後も自宅と変わらないような生活が送れるようになっている。

ありたい姿6 相互に支え合う生活支援・介護予防

住み慣れた地域には健康づくりや住民同士がつながる場所があり、高齢になっても、介護が必要になっても地域の中で役割がある。

（世代を超え、支え合うコミュニティが地域の身近にある）

2025年の目標

地域の身近な場所で、住民主体による介護予防や助け合いの取り組みの参加者が増えている。

2040年の理想

市民は、地域の互助による自発的な活動に参加していて、若い世代も介護予防や助け合いの活動に積極的に参加している。

医療と介護のありたい姿 ロードマップ

ありたい姿7 誰一人取り残さない

誰一人取り残されず、一人ひとりの安心が守られ、地域の隅々まで医療と介護、生活支援がいきわたり、自分らしく生きることができている。

(医療や介護を拒否する人でも支援に繋がり孤立している人がいない)

2025年の目標

地域包括支援センターは市民、民生委員、専門職等と連携して、地域の潜在的な課題を発見し、予防的に支援することができている。

2040年の理想

全ての高齢者は、地域包括支援センターと顔が見える関係で繋がっていて安心して生活できている。

※ 専門職＝医療職、介護職（福祉職）の総体

※「2025年の目標」と「2040年の理想」について

現在、団塊の世代が75歳以上となる「2025年」を見据えて、医療・介護が必要な状態となっても住み慣れた地域で暮らし続けることができるよう、医療・介護・予防・住まい・生活支援が包括的に確保される地域包括ケアシステムの構築に取り組んでいます。また、団塊のジュニア世代が65歳以上となる「2040年」には、高齢人口がピークを迎えると共に、医療・介護ニーズの高い85歳以上人口が急速に増加することが見込まれています。団塊の世代（1947（昭和22）年～1949（昭和24）年生まれ）／団塊のジュニア世代（1971（昭和46）～1974（昭和49）年生まれ）

【 医療と介護のありたい姿の評価指標 】

1 希望の看取りを共に考える	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅看取り回数 ・死亡者数に占める自宅死（老人ホーム死の割合） ・死亡患者数／合計診療患者数 ・市民の在宅医療の周知度 ・市民の ACP の周知度 ・市民のエンディングノートの作成度 ・要介護高齢者の介護への満足度 ・家族の介護負担 ・在宅療養を希望する市民の割合
2 本人を第一に考えた多職種連携	<ul style="list-style-type: none"> ・ケアマネジャーの連携状況の認識 ・地域包括支援センターの相談数
3 専門職のスキルアップとやりがい	<ul style="list-style-type: none"> ・多職種連携のための意見交換会、ケアマネジャーや地域リーダー研修会の参加者数 ・ケアマネジャーの仕事満足度
4 認知症になっても安心して暮らせる地域	
5 多様な生活の場の提供	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅医療提供事業者・訪問看護ステーション数 ・訪問診療回数、訪問看護実施数 ・通所系サービス・施設サービス・居住系サービスの要支援・要介護認定者一人あたり定員数
6 相互に支え合う生活支援・介護予防	
7 誰一人取り残さない	<ul style="list-style-type: none"> ・地域包括支援センター相談数